

は老幼婦女子である。引揚げた私は子々孫々に至るまで平和を大切に守り継承する決意を更に新たにした。

現地召集を受けた一引揚者の手記

鹿児島県 石原 匠

大東亜戦争も終末に至るや、当時満州国牡丹江省の石頭に軍人として召集をうけ、捨身の心で訓練をうけていたが、終戦となったのは、私二十歳だった。

昭和二十年九月二日、武装解除となり、ソ連軍の使役を利用されたのち、ソ連兵に引率されて、険しい山又山を越え、どことも知らない広場まで、約五日間の行軍が続いた。

食糧も少なく、体力つきで倒れる者は数知れず、人員も段々となくなり、倒れた戦友を抱きおこし、背におんぶして数十里も歩き続けたが、背中死んでしまった戦友を、安らかに眠れと山中に埋めたことを思い出すと、今も涙が流れてくる。どこの駅だか記憶にな

いが、ソ連軍に監視された中で乗車し、約三百人は家畜を積み込む貨車に乗った。そこには自動小銃もつた若いソ連兵が乗りこんで厳重に警戒している。

一步も貨車の外には出られない。ソ連兵の通訳から聴けば、日本は負けたので、みんなを日本へ帰すのだ、と言って三日目の夜半に貨車の扉を閉じられて、どこに行くのか見当つかず、疲れて皆車中で、ぐっすり眠ってしまった。

そのうち、停車した駅に下車して、広場で人員点呼を行い、作業別に土木、建築、工業機械、農業に分別して編成された。そしてそれぞれソ連兵の誘導で別れて行った。

私は農業を主とする作業で約百人と一緒に再び貨車にのせられた。その貨車は、ハバロフスクを経てウオロシロフで停車したが、夜間になってから再び進行した。この貨車には電灯もなく、小さな窓から外を眺めてもどこを走っているのか見当もつかない。やがて下車したところは、チタ駅だった。食事は黒パンにスープをとり、暫く休憩していたとき、誰からともなく所

持品に気をつける、と大声で叫んだ。みんなは慌てて股間に入れたり、帽子や靴底に隠したりもしたが、仲間の中で時計、万年筆、指輪など掠奪された。強奪されるのに何の抵抗もできないのは情けない。憤怒やる方なかつた。

それから更に一時間ぐらい貨車に乗って降りたところで、食糧、作業用具を積んだトラックに乗せられて市街地から山林地に向かって約二時間を経て作業地に着いた。早速二人一組になって、長い鋸で切り倒す作業である。

毎日が山林作業の繰り返し、食糧は最初黒パン大の一個づつであつたが、あとでは二人に対して一個づつの配給になり、スープの量も少なくなったので水を加えて飲む有様である。結局、栄養失調になって起き上がる力がなくなる者、作業に出ても現地で倒れる者が出てきたので、作業する人数も段々と減つていった。瘦せ衰えた戦友達の手から、お守りや形見の写真や遺品を差し出して、これを頼むと言って、異国で息を引きとつたのだった。今思い出しても断腸の思いになる。

誰が最後まで残るか、忍耐と気力の競い合いであつた。九月下旬だったが、早や肌寒く、作業中はソ連兵が巡視していて、怠けるのではないが栄養失調だから身体がふらつくのである。それに銃を突きつけ、ダバイと言つて叱咤し殴られる。こうした哀れな目に遭つた戦友は自決しようとしたことがあつた。ここまで辛抱したのだ、もう一息だから我慢しろと励まし合い、思いとどめさせた。

食糧や医療品まで全部輸送を頼りにしていた地方なので、すべてが間に合わず、病死、餓死するものが続出して人員も約半数となつた。

その頃、ソ連将校と軍医と通訳が、収容所を觀察に来て、日本人の体力消耗した病弱の多いのに驚嘆して、ソ連国外の満州地区に護送するようになった。しかしどこに護送するのか、はっきりしなかつたが、数日間貨車に乗つて着いたのは、国境を越えて満州国内の旧日本軍の兵舎跡である。

ソ連国境を離れて日本人同志と顔を合せ、感無量、初めて生きかへつた気持になつた。

満州国内の収容所ではパン、野菜、大豆入りの粥食、

玉蜀黍に舌づつみし懐かしい思い出となった。

この収容所で約一か月の生活で、どうにか体調は回復し、収容所の責任者から、若し満州国内に知人、兄弟、戦前交際した人などのところに行く希望あれば自由に行ってもよいとの達示があったので、みんな寄り集まって相談しあいそれぞれ出発することになった。真つ先に独身者が出発し、次には妻帯者達が出発した。私は三回目に出発した。共産八路軍に合うと殺されると聞いて、昼間は山中か高粱畑に隠れ、日没になってから動き出す。満鉄関係の人の誘導で大変助かったのだった。

一番に困るのは食べるものである。大根、葱、白菜、玉蜀黍を生のまま齧り、生菜の一切れでも大事にして生命をつないだ。

みんな、日本に帰るまでは、と一回家族のようにして泣いたり、叱ったり、笑ったり励ましあい、食物を見つけては分けあって食べたたり、他人の子供を背負いながら助け合って歩き通したが、昭和二十一年十一月

一日、無事奉天に着いた。

敗戦の記

宮城県 村上 広三郎

北朝鮮会軍の飛行隊を現地除隊して、満州電々に就職することになった。任地は牡丹江電報電話局。着任したのは、昭和十五年八月十五日。それから四年の間に關特演に際して山下奉文大將が、東満地区総司令官として来任するなど、緊張する状態であったが、反面比較的平穩な日々が続いた。

夢破れたのは、忘れもしない昭和二十年八月九日早晩のことである。非常召集の電話で、社宅の同僚たちと何ごとかと出社、ソ連軍の越境を知ったのである。

情報によれば虎林、虎頭、綏芬河からの通信が途絶え、東安から「これから山に入る。サヨナラ」の悲壮な訣別の通信があったと言ひ、ソ連軍の怒濤の進撃と牡丹江指向が推測された。社内は騒然となり、秘密